天まで響く蛙声と生命力、福島が生んだ土着性の詩

澤正宏氏（福島大学名誉教授）に聞く、『草野心平研究資料集』（第一回配本・全三巻、クロスカルチャー出版）

先ごろクロスカルチャー出版より『草野心平研究資料集』全三巻が刊行された。詩人の草野心平（一九〇三～八八年）生誕百二十周年、没後三十五周年の記念出版である。全集に収められなかった詩人の著作にも注目し、貴重な初出資料に重点を置いた、新たな詩人像を浮かび上がらせる資料集である。

ここに復刻された詩誌や雑誌に掲載の詩や訳詞、評論、座談や童話をはじめ、挿絵が入った版面などからは、刊行当時の詩と文学の気風が甦ってくる。本書をめぐって、編集・解題を担当した澤正宏氏（福島大学名誉教授）に話をうかがった。

（福島市にて。聞き手・米田綱路〔本紙編集〕）

詩誌や雑誌の初出形に重点を置く

――『草野心平研究資料集』は、草野心平と同郷の福島出身であるクロスカルチャー出版の社主、川角功成さんの念願の企画だそうですね。本書刊行の経緯についておうかがいします。

澤　川角さんとは福島に来る以前、私が京都にいた頃からの知り合いです。その縁もあり資料集の刊行を引き受けていただきました。

草野心平は実に多くの蛙や富士を詠んだ詩人として知られています。いまから三五年前、福島大学に赴任した私は、この詩人がどのようにして自然を詠んだのかに関心を持ち、「草野心平論――表現者としてのアナキズム」などの論文を書いてきました。

以前、資料集を作るために研究者や古書肆と組んで、近代・現代日本の詩誌を集めたことがあります。その過程で一九二〇年代、大正期から昭和初期にかけて出された稀覯の詩誌を発見することができました。たとえば詩誌『銅鑼』などがそうですが、そこには心平の蛙の詩や翻訳詩などがたくさん載っています。日本の詩がますます現代詩としての特色を濃厚にしていく時期の詩誌ですが、心平にとっても自分らしい独自の表現を獲得していった時期です。

その頃の詩を読むことで、これまでほとんど知られてこなかった心平の表現に触れることができました。そして、生前に刊行された『草野心平全集』全二巻（筑摩書房、一九七八～八四年）には収められなかった表現にも注目する必要があると考えるようになりました。

それからは初出資料を収集する作業を続け、ようやく『草野心平研究資料集』にまとめることができました。

編集に当たっては、これまで全貌がつかめなかった心平の戦前から戦中にかけての訳詩、アナキズム詩や詩論、プロレタリア詩、宮澤賢治や尾形亀之助などについての評論、随筆などを、初出形に重点を置いて復刻する方針を採りました。

心平は賢治や亀之助のほかにも山村暮鳥、村山槐多らに関する評論を書いていますし、中原中也らと詩誌『歴程』を創刊（中也は第一、二、四、五号に詩を発表）するなど、同時代の数多くの詩人たちと交流しています。また、童話なども書いています。戦中から戦後にかけて、さまざまなテーマで座談会も行っています。『草野心平研究資料集』からは、これまでまとまっては読むことができなかった、さまざまな作家や詩人たちとの関係や交流を読みとることができます。

――本書からは、「アナキズム詩人」に収まらない、草野心平の表現の世界が見えてきます。

澤　二〇世紀初め、日本では前衛詩やモダニズムが流行りました。なぜそういう現象が起きたかというと、一九世紀のものの考え方や、二十世紀の二度の世界大戦を受け入れがたい芸術家たちが、それを否定する意味で、たくさんのイズムをもった思想をつくったからです。

そうした思想は日本にも伝播してきましたが、アナキズムというものの考え方に影響を受けた一人である草野心平を、どうとらえるか。イズムに閉じ込めてはいけませんが、心平はどういう人なのかを知りたいと思いました。激動する社会に生きた彼の純粋な表現はどこからくるものなのか、という問いがこの資料集を作るきっかけとなりました。

ただし、のっぺりとした迫り方ではいけないので、わかりやすくいえば芸術傾向としてのダダイズムやプロレタリア文学に彼の作品をいったん振り分けて、差異を考えながら見ていくことにしました。

大正期から昭和初期にかけて、芸術主義者とプロレタリア詩とが昭和初期の頃の日本の現代詩を二分していることを、心平は明確に認識しています。たしかに、二〇世紀の初めにはいろんなイズムが生まれましたが、日本に来る頃には、元の意味を失っているものも多い。ダダの詩、プロレタリア詩などがあり、アナーキーの意識からアナキズムの詩も生まれましたが、心平はそんな流行だけでは書いていない。信念がないと書けない詩を書いています。

昭和元年末のマルクス主義者とアナキストの分裂は、詩の表現者としての心平にとっては大きな問題ではなかったのだと思います。政治が介在し、革命に文学が奉仕するというような目的意識の注入など、彼の眼中にはなかったということでしょう。

心平の中で大きなテーマになっているのは、自然を詠うことです。そこに、比喩としても読解可能な蛙が出てきます。一九二八年に、蛙を中心とした詩集『第百階級』を出しますが、ここで心平は、蛙と蛙を取り巻く世界を擬人化し、想像力を広げました。自然と癒着し、生産などとは無縁な力エルの暮らしの表現の中に、生きることに前向きであるけれども虚無、倦怠、叫びなどが内包されている詩を書きました。この点で、心平の詩はからっとして穏やかなアナキズム詩の表現になり得ていると考えます。ここにはプロレタリア詩の特色は見当たりません。

それから、心平は「食う」ことにこだわります。これは生活といってもいいでしょう。そういうところに根本を据えて詩を書いている。自然と食うことを率直に表現する、プロレタリア的なところもあるエネルギッシュな詩人です。

心平は宮澤賢治の詩集『春と修羅』を読んで感激し、雑誌『銅鑼』に寄稿しないかと誘います。賢治に注目したのも、やはり労働や食うことからです。たとえば賢治の童話「オツベルと象」は、いまでいうと過労死する動物を書いている。けれども賢治は、労働は好きだったし、働いていればかならず救われると考えていた。貧乏だけれども、食っていければいいと。心平はそこに惹かれたのだと思います。そうした面白い詩人なのです。

それから、『草野心平研究資料集』に収録した初出形で、全集からは見えてこない心平の表現が見えてきました。その一つは、欲望や性の問題です。

――心平の言葉でいえば、「生理的にまでズシンとくる」詩を書こうとしたのですね。

澤　そうですね。蛇や蛙などはセクシュアルな存在でもあります。とくに蛙は、夏には天まで響くような鳴き声を出しますし、生命力があり、繁殖力がある。これは高湿多湿なアジアの風土に合っている生き物です。日本の風土にいちばん合っているといえるのではないでしょうか。

蛙は形象化しやすいですし、類としての多さがあり、はり放射能に敏感に反応しているのでしょう。汚染水の海洋放出をし始めたけれども、いったい魚介類や海藻、プランクトンはどうなるのでしょうか。

鶯もいなくなりました。台湾から峨眉鳥が飛んできて駆逐してしまったそうです。地球の異常な温暖化現象などが核災と相まって、生物の棲み分けや分布、はびこり方が書き換えられてしまったのではないかとも感じてしまいました。

こうした危機を前に文学は、先を見る目でものを書かないといけないと教えられた思いです。

第二次世界戦が終わった後、作家は社会意識を持ち、戦争体験を見つめなければならないと考えました。それと同じように、今日の作家は広いパースペクティヴを持ちながら、地球規模にものを考えていかないといけない。特別なことでなくとも、純粋に自然を考えていいし、自然を純粋に書いていけば、こういう自然があるのだと発見できる。そういう形で、もういちど地球的なものを見ていかないといけないと思います。

――『草野心平研究資料集』も、今日的な問題意識から読んでいくアプローチがあり、自然を見つめる表現の中に、新たな気づきや発見がある可能性を感じます。

澤　全集が出ているので、これで草野心平がわかると思われがちですが、この資料集からは詩人の多面的な側面が見えてきます。これによって、定説になっている詩人像を変えたいというのが私の願い（〈）側についた。そんな彼の中では、日本帝国主義とファシズムの問題があまりよく見えていなかったのではないでしょうか。だから大政翼賛会のほうへ引っ張り込まれたのです。

心平は富士山を何度も詩に書いていますが、彼の中で富士は神聖なものとして捉えられています。それは、詩が求める絶対や永遠への希求でもあったと思います。ですからストレートに富士山を詠んだ。そこにはストレートという意味で、ドイツ生まれの新即物主義（ノイエ・ザッハリヒカイト）の影響もあったでしょう。

それに対して、たとえば詩人の金子光晴は、詩「富士」のなかで「洗いざらした浴衣のような富士」と詠います。威圧的な富士をとらえて、日本人は封建制に負けてばかりいると彼は批判しますが、心平にとって富士は内発的なものであり、鼓舞される即物的な、永遠のものです。

たとえば萩原朔太郎は、鋭い感性の面から存在の独自性を崩壊させていくような詩を書いています。それは近代詩から現代詩へと、内面的な自分が自分を壊していく過程です。現代詩はそれを、それとの格闘なしに乗り越えていきますが、内面には確固として孤独な自分、憂鬱な自分が残っている。それが真に追求されていれば、簡単には戦争へと行かなかったかもしれません。

心平にとっては土着的なものが重要でした。彼の詩「ヤマカガシの腹の中から仲間に告げるゲリゲの言葉」に、「死んだら死んだで生きてゆくのだ」という一節があります。これは蛙の表現としてですが、心平は総じて生きること、生命を詠う表現主義（生の根源、魂の表現を追求、ドイツに始まる）の詩人であったといっていいでしょう。表現主義を立体的に見せるのが立体主義（キュビスム。絵のすべてをキューブで構成、フランスに始まる）ですが、「●」（詩「冬眠」）などは蛙を通してその姿を言葉によってデフォルメしたわけです。蛙の力強さは心平的といえます。

――草野心平より少し年上ですが、同時代の詩人、西脇順三郎の『西脇順三郎研究資料集』全三巻（クロスカルチャー出版）もまとめられています。二人の詩人の対比についてはどうお考えですか。

澤　西脇順三郎はモダニズムの詩人で英文学者であり、戦前にはダダやシュルレアリスム運動を理解し、その中心で詩作し、何度もノーベル文学賞の候補に挙がりました。けれども頭だけで生きていた詩人ではありません。頭のなかでできた言葉だけでは詩を作らなかった人です。彼の大切にしていた概念というのは二物衝撃の美しさであり、自分の感性に沿った美しさを求める人でした。マラルメのように、万巻の書を読んでも肉体は悲しいと詠うような孤独を払拭する詩人です。ですから、たくさん生まれては消えていったモダニズムの詩人の多くが言葉遊びに終わったのに対して、詩作の底辺では孤独や憂鬱に抵抗していた西脇は、近代から現代への詩の受け渡しができたのだと考えます。

心平の詩は、あくせくしている生活の中から出て来た言葉です。そして土着的ですから、孤独や憂鬱を蛙に仮託したのです。それは目先だけの表現ではない。心平の土着性は、ここ福島の地で生れ育ったことが大きいと思います。

東北の人間は、土地、風土に愛着はあるけれども、中央から離れているためにマイナスの意識も強い。それゆえ東北から東京へと出ていった人には、東京を飛び超えて世界へ出て行くエネルギーがあり、しかも自然や土着的なものへの愛情がある。まさしく心平はその一人です。

放射能で汚染された大地

――自然と土着的なものへの愛情は、東日本大震災と福島原発震災によって試練に晒されてきました。『福島原発設置反対運動裁判資料』全七巻（クロスカルチャー出版）の解説・解題を執筆されていますが、草野心平の表現は、原発震災という文明的、地球的な危機に直面する私たちにも示唆を与えるといえるでしょうか。

澤　福島での核災の後に、『福島原発設置反対運動裁判資料』の基になる裁判資料を読んで、すでに一九七〇年代に原発の根本的な問題や危険性が明らかにされていたことに驚きました。ちょうど福島大学を定年で退職したときで、ようやく文学研究三昧の生活ができるかと思っていたのですが、研究そっちのけで裁判資料と格闘することになりました。

核災は、人間が積み重ねてき、表現して来た文化遺産が一瞬にしてなくなる危険性をもたらしました。世界全体が危機に襲われています。そのことを示すかのように、核災以降、心平が詠み続けた蛙が福島のあちこちからいなくなってしまったのです。今から三五年前に福島市郊外のこの地に引っ越してきたときには、ドアを開けると蛙声が一斉に飛び込んでくるような感じで賑やかだったのですが、核災後はぱたりと消えました。

それから、セミが鳴かなくなり、蟻が出なくなり、イナゴや蛍が一匹もいなくなりました。小さい生物が消えてしまったのです。やす。汚染土を庭に置いたら芝生が真っ白になるなど、植物にも明らかな影響が出ています。

T・S・エリオットは荒地といいましたが、二一世紀は放射能で汚染された大地という捉え方をしないといけないでしょう。汚染土や汚染水の持っていき場がないし、放射能を浴びた廃棄物の捨て場もない。ゆくゆくは放射能で汚染された大地が、どんどん大きく広がっていくような事態が進んでいきます。

先日、温暖化で溶けていくスイスの氷河を守るために、巨大な遮熱のカバーをかけている映像を見ました。たしかにヒートランド化が進んでいますが、氷河に掛けられたシートを見て、もはや事態はここまで来てしまっているのかと思うとともに、こんなことをしても意味がないのではないかとも感じてしまいました。

こうした危機を前に文学は、先を見る目でものを書かないといけないと教えられた思いです。

第二次世界戦が終わった後、作家は社会意識を持ち、戦争体験を見つめなければならないと考えました。それと同じように、今日の作家は広いパースペクティヴを持ちながら、地球規模にものを考えていかないといけない。特別なことでなくとも、純粋に自然を考えていいし、自然を純粋に書いていけば、こういう自然があるのだと発見できる。そういう形で、もういちど地球的なものを見ていかないといけないと思います。

――『草野心平研究資料集』も、今日的な問題意識から読んでいくアプローチがあり、自然を見つめる表現の中に、新たな気づきや発見がある可能性を感じます。

澤　全集が出ているので、これで草野心平がわかると思われがちですが、この資料集からは詩人の多面的な側面が見えてきます。これによって、定説になっている詩人像を変えたいというのが私の願いです。そしてこの記録と事実に、現代にとってどういう意味があるのか、それが生きるのかを探ってほしいと考えています。

百年前の文学と芸術は、政治をものすごく意識していました。戦争をするような政治や社会を何とかしたいという思いで、シュルレアリスムのような運動が出てきた。抑圧された意識や、こういう世界であってほしいという希望をどんどん芸術にしていった。それに対して、百年後の二一世紀の今日には、どうしてそういうエネルギーがなくなってしまったのでしょうか。戦争が起きているのに、新しい言語運動や芸術運動が起こらないのはなぜだろうか。

二〇世紀の初めには、世の中を変えたいという願望や、自由とは何かを本気で考える表現が数多く生まれました。未来主義のように都会万歳のようなものもありますから、もちろんすべてがいいわけではありません。よくない面もあります。ですが、サルトルが言ったように、文学なんて役に立つのか、意味があるんだろうかと問いかけ、意識しながら表現を生み出していってほしい。

たとえば、いまパレスチナとイスラエルの紛争が激化していますが、ガザ地区のガザとは、ガーゼの語源だそうです。ガザ地区ではこの瞬間も、子どもたちが傷つき、怪我をしてガーゼや包帯に包まれている映像が毎日流れてきます。そこにも、現代の戦争に対する表現の可能性があることを感じます。

それから、福島に生れ育った心平の土着性とも関わりますが、先日、南会津の柳津町の石生前遺跡をほじめ、奥会津の七町村で出土した縄文土器や石器の展示を見てきました。只見川流域にかつて栄えた縄文文化の名残りで、とても見ごたえがありました。

そうした文化と現在の歴史がつながっていることを縄文土器に教えられ、エネルギーを与えてもらった気がします。弥生時代以降の権力構造や、交換に基づく経済が生まれる以前の、贈与を基本とする縄文文化は、きわめて今日的なテーマにつながってきます。ここにも言語芸術や文化運動につながる土着性があるように思います。

二一世紀の現在は混沌としており、電子機器が発達した時代ですが、この資料集に収録した詩に見られる心平の土着性をとおして元に還り、人間にとって自然とは何か、生きる意味とは何かを考えてみる。そこから生きがいや、人間にとって大切なものを学ぶことができるのではないでしょうか。

いま福島市のこの里山辺りから、蛙のたくさんいた姿が消えてしまいました。けれども心平は天まで響く蛙声を聞いて、まさしく天まで届くような生命力を感じた。そんな詩人が自然をどう詠んだのかを知ることで、二一世紀の時代と社会、そこに生きる人間への示唆を得ることができると考えています。

（了）

東北の人間としての土着性

――草野心平は戦前から戦中にかけて中国で長く生活していますが、その体験が詩の表現に与えた影響もあるのでしょうか。

澤　心平は学生時代、青春のさかりに中国に行っています。当時の中国にはアメリカの左翼的な詩がどんどん入ってきていた。心平はそれらを読んでいましたし、サッコ・ヴァンセッティ事件をいちはやくキャッチしています。すでにフレーム合アップという言葉も出てきます。資料集の第三巻『翻訳詩　随筆　評論など――一九二五（大正一四）年～一九七五（昭和五〇）年』に収録しましたが、一九三一年にはイスラエル・カスヴァン「サッコとヴァンゼッチ」の訳詩を発表しています。

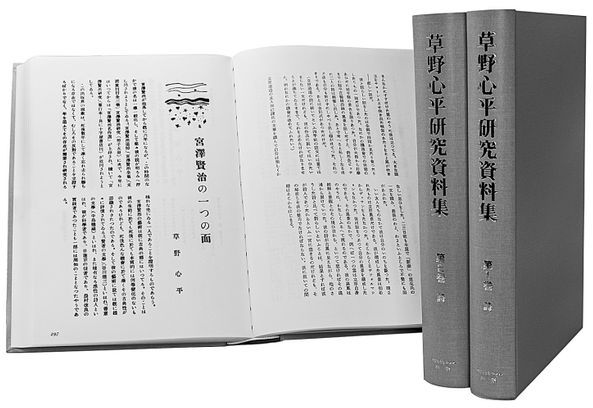
この第三巻には、心平が訳したアメリカのアナキズム詩集が収められています。これまで知られていなかった彼の翻訳詩は、ほとんどここに網羅できたと考えています。

――心平はどのようなテーマの詩を翻訳したのでしょうか。

澤　やはり彼のまざざしの先には貧しい人や子どもがありました。貧乏な生活などを詠んだ詩を訳しています。子どもへの関心は強く、児童文学も手がけています。

――戦争が終わるまで南京に滞在し、中華民国国民政府の宣伝部顧問として活動していました。

澤　心平はアジアに興味を持ち、そういう目で中国を見ていました。そして中国の人と仲良くしていました。ですから、ヨーロッパが帝国主義によって中国を分割することに対して、アジアの（〈）



▼文学・言語研究資料シリーズ4『草野心平研究資料集』（第一回配本、全三巻）澤正宏編集・解題、9・30刊、B5判総約一七〇〇頁・本体九〇〇〇円・クロスカルチャー出版

エコーする〈知〉。クロスカルチャー出版の〈文学・言語研究資料シリーズ〉〈日本現代史シリーズ〉

【文学・言語研究資料シリーズ4】
草野心平研究資料集　第1回配本 全3巻
【最新刊 編集・解題：澤 正宏（福島大学名誉教授）
●定価 本体90、000円＋税　●B5判・上製約1、700頁
「蛙」や「富士」を数多く詠んだ詩人の生誕120周年。没後35周年記念出版。詩誌、雑誌、選詩集に掲載された「初出形」で復刻。心平説明の木版画「黄包車（わんぽつ）」は本邦初公開。

【文学・言語研究資料シリーズ2】
西脇順三郎研究資料集　第1回配本 全3巻
編集・解題：澤 正宏
●定価 本体88、000円＋税　●B5判・上製約1、900頁
西脇順三郎没後30年記念出版。詩集、詩論集、全集未収録資料等を収載。

【文学・言語研究資料シリーズ2】
西脇順三郎研究資料集　第2回配本 全3巻
編集・解題：澤 正宏
●定価 本体90、000円＋税　●B5判・上製約2、000頁
詩集、詩論集、文学論集、全集未収録資料等を収載。

【文学・言語研究資料シリーズ3】
近現代日本語辞典選集　第1回配本 全4巻
編集・解題：澤 正宏
●定価 本体120、000円＋税　●B5判・上製約2、500頁
近代詩用語辞典、プロレタリア文藝辞典、モダン語辞典、モダン流行語辞典等10点収載して復刻。

【文学・言語研究資料シリーズ3】
近現代日本語辞典選集　第2回配本 全4巻
編集・解題：澤 正宏
●定価 本体120、000円＋税　●B5判・上製約2、000頁
袖珍新聞語辞典、現代新語辞典、特高新辞典、日本性的風俗辞典、世界性欲学辞典等13点収載して復刻。

【文学・言語研究資料シリーズ3】
近現代日本語辞典選集　第3回配本 全3巻
編集・解題：澤 正宏
●定価 本体90、000円＋税　●B5判・上製約1、800頁
新詩辞典、新文藝辞典、故事熟語大辞典等4点収載して復刻。

すぐ手に取りたくなるクロスカルチャー出版のラインナップ

【文学・言語研究資料シリーズ1】
近代日本語教科書選集　第1回配本 全5巻
編集・解題：李長波（同志社大学教授）
●定価 本体120、000円＋税　●B5判・上製約2、100頁
言文對照漢譯、日語指南、実用東語完璧、東語集成、日語話法等11点収載して復刻。

【文学・言語研究資料シリーズ1】
近代日本語教科書選集　第2回配本 全5巻
編集・解題：李長波
●定価 本体130、000円＋税　●B5判・上製約2、700頁
春秋雑誌、会話篇、和文漢讀法、日英語比較研究、和漢英對照文法等21点収載して復刻。

【文学・言語研究資料シリーズ1】
近代日本語教科書選集　第3回配本 全4巻
編集・解題：李長波
●定価 本体120、000円＋税　●B5判・上製約2、200頁
交易問答、にほんごとくほん、東語初階、漢譯日語要覧等17点収載して復刻。

【日本現代史シリーズ12】
戦後自閉症児教育研究資料集　全3巻
【新刊 編集・解題：細渕富夫（埼玉大学名誉教授）
●定価 本体95、000円＋税　●B5判・上製約1、700頁
日本の自閉症研究・教育がどのように進められてきたのか。1960年～2004年までに掲載された雑誌から珠玉の論考約260篇をセレクトして復刻。

【日本現代史シリーズ1・2】
福島原発設置反対運動裁判資料　全7巻
編集・解説：安田純治（元弁護士）・澤 正宏
●定価 本体238、000円＋税　●B5判・上製約4、100頁

【日本現代史シリーズ3・4】
伊方原発設置反対運動裁判資料　全7巻
解説：藤田一良・解題：澤 正宏
●定価 本体250、000円＋税　●B5判・上製約5、200頁

●澤 正宏の単行本●　好評発売中!!
『今原発を考える――フクシマからの発言〈改訂新装版〉』A5判・並製　定価：本体1200円＋税
『21世紀の西脇順三郎　今語り継ぐ詩的冒険』A5判・並製　定価：本体1200円＋税
『詳説福島原発・伊方原発年表』B5判・上製　定価：本体25000円＋税
『核災10年、福島からの声―原発・裁判・文学の記録―』A5判・上製　定価：本体3600円＋税

クロスカルチャー出版
〒101-0064 東京都千代田区神田猿楽町2-7-6
TEL：03-5577-6707　FAX：03-5577-6708
http://crosscul.com/